

「経済学」と「経済」教育の乖離 その5

私と公の関係を対立と捉える考え方の分析

A Gap between Economics and Social Studies Part5

宇多賢治郎
Kenjiro UDA

「経済学」と「経済」教育の乖離 その5

私と公の関係を対立と捉える考え方の分析

A Gap between Economics and Social Studies Part5

宇多 賢治郎¹

Kenjiro UDA

キーワード：うちとよそ、私と公、利と益、もうけと効用、理論と方便

A. D. Lindsay “What is needed, and what is most difficult, is to combine the technical knowledge of the expert with the practical experience and understanding of the common life of the ordinary public.”

1. はじめに

筆者は本紀要の前身である『山梨大学教育人間科学部紀要』、第16巻（第23号）から、「経済学」の基礎理論と社会科の公民教育に必要な「経済」の知識の違いを比較してきた²。

今回は、「家」や社会、また会社といった名称がつけられた「人の集団」（最少は一人）が、「もうけ」という価値基準を基に、「うち」と「よそ」に区別している基本的な行動理念を整理する。これにより教養教育、特に社会科教育の意義を理解していれば、小学校社会科の目標でも取り上げられている「グローバル化」に対応することは、特別なものではないであることを示す。

そのため、本稿では経済学が重視する「もうけ」に基づいて論点整理を行う。つまり、「もうけ」を私的な「利」と公的な「益」に分けて整理し、ミクロ経済学に基づいて「利潤」という金銭的欲求、また「効用」という自身の精神的欲求の二つの欲求に基づけば、複雑に見える問題が説明できることを示す。これにより、社会構造が複雑になったことで捉えることが困難になっている対立の問題、例えば国家とグローバル、地域と国家、会社と国民経済、家族と近所などの関係で生じる問題に共通する性質を示す。

また、この説明を始める前に、以下の二点を確認しておく。第一に、本稿は例としてグローバルと国家の対立関係を多く用いる。この例を使い、言葉や経済理論の意味を確認することで、結論ありきで情報を恣意的に選択し、反証を「悪」と決めつける「方便」の特徴を明らかにする。また、この作業を通し、客観的に採るべきでない行動を明らかにし、聞き手はそれに対し、安直に流されぬよう、用心する必要があることを説く。

第二に、本稿は経済学の基礎理論を否定するものではない。基礎理論は単純化、抽象化によって構築されるが、それは特定の事象を分析するという目的に合わせた便宜上の方法でしかない。しかし、このような基礎理論の性質を無視して、理論が捨象せざるを得なかった要素を存在しないものとし、現実を分析、評価する方法が、「方便」に用いられていることを問題視する。

2. 前提：社会科教育の必要性の確認

2-1. 「社会」の意味と、「私」と「公」の対立

まず、本誌に掲載しているもう一本の論文、宇多（2020）を初め、他の論文でも紹介したように、

¹ 山梨大学（教育学部 准教授）、kuda@yamanashi.ac.jp 筆者 Web ページ：http://www.ccn.yamanashi.ac.jp/~kuda/

本稿の執筆の際、本学部皆川卓教授には、西洋史を専門とされる立場から貴重な意見をいただくなど、執筆の際は大変お世話になった。ここに記して感謝申しあげる。

² 学部改組に合わせた名称の変更、一年あたりの発行回数の変更などから、現在は「号」のみ表記されている。

『世界大百科事典 第2版』（平凡社）に「家」の「基本的機能は成員の生活保障にある。」と説明されていることを、前提として確認しておく。人がわざわざ集団を作るのは、互いの生命と暮らしを守るためであり、それに反して自身の利のために他の「成員の生活保障」を、つまり生存権を始めとする権利を否定する行為、またそれを正当化する「方便」を、問題と考える立場で説明を行う。

まず「社会」と「Society」の意味を二つの辞書で調べ、それらの共通点を確認する。

本稿では、国語辞典、英英辞典から、比較がしやすいように説明されていたものを紹介する。

社会 （大辞泉）

《英語 society の訳語として「社会」を当てたのは、明治初期の福地桜痴（源一郎）である》

1. 人間の共同生活の総称。また、広く、人間の集団としての営みや組織的な営みをいう。
2. 人々が生活している、現実の世の中。世間。
3. ある共通項によってくくられ、他から区別される人々の集まり。また、仲間意識をもつて、みずからを他と区別する人々の集まり。
4. 共同で生活する同種の動物の集まりを1になぞらえていう語。
5. 「社会科」の略。

Society （American Heritage）

1. a. The totality of people regarded as forming a community of interdependent individuals.
- b. A group of people broadly distinguished from other groups by mutual interests, participation in characteristic relationships, shared institutions, and a common culture.
2. An organization or association of persons engaged in a common profession, activity, or interest.
3. The wealthy, socially dominant members of a community. Also called high society.
4. Companionship; company.

まず、派生的な意味を除いた、日本語の3番まで、英語の2番までを比較し、共通点と相違点を確認する。これらの説明の共通点は「人の集団」である。また自発的な場合また他者から扱われる場合のいずれにせよ、他集団の人を「区別する」あるいは自分たちが「区別される」とあることから、ある程度「排他性」持つ「人の集団」であることが分かる。

この「排他性」が示すように、人は「社会」を「境界」で区切り、境界を挟んで「うち」と「よそ」を判断し、区別する。例えば、「収支」つまり金勘定を行う場合は、集団の定義によって、全く異なるものになるため、これを曖昧にすることはあり得ないことのはずである。

要は、集団の規模の違いはあっても、共通するのは「うち」と「よそ」を明確にし、「うち」の人は互いをどのように扱うか、「よそ」の人をどのように扱うかである。それを決める権利のことを、「主権」という。

主権 （大辞林）

1. 他国の意思に左右されず、自らの意思で国民および領土を統治する権利。独立権と同じ。
2. 国家の意思や政治のあり方を最終的に決定する権利。〔「附音挿図英和字彙」（1873年）に英語 sovereignty の訳語の一つとして載る〕

この説明では国家に限定されているが、「社会」の意味にもあるように、「人の集団」を作り、それを維持する基本は「自分たちのことは自分たちで決める」ということである。しかし、例えば国家と会

社の関係のように、より大きな「人の集団」に集団ごと所属する、また所属はしていなくても滞在する、商売するなど、内在の関係になることがある。その場合は、内在する「人の集団」や個人の「主権」は、「公共の福祉に反しない限り」といった、より大きい集団から制約が課せられることがある。

一方、「社会」と「Society」の相違点としては、日本語の2番には「世の中」がある。この説明は英語にはなく、また日本語の1番と3番とも大きく異なっている。これに対し、日本語の説明の冒頭には、「社会」という言葉は「society」の訳語として「当てた」という説明がある。この説明の通りならば、「社会」は訳語にも関わらず、元の語句にない「世の中」という意味が追加されたことになる³。そこで本稿では、このような意味が追加された歴史的経緯の検証ではなく、他の語句と比較することで、加わる理由を検証する。

そのため、説明に必要な語句の意味を確認する。

まず「私」と「公」の意味を、辞書で確認すると、次のように説明されている。

わたくし、私 (大辞泉)

1. 自分一人に関係のあること。個人的なこと。
2. 公平さを欠いて、自分の都合や利益を優先すること。また、公共のための事物を私物化すること。

おおやけ、公 (大辞泉)

1. 政府。官庁。また、国家。
2. 個人の立場を離れて全体にかかわること。社会。公共。世間。

この説明の通りなら、「私」は「公」をないがしろにするものであり、「公」のためには「個人の立場を離れ」なければならないのだから、対立せざるを得ない関係ということになる。一方、現代的な使われ方に重点を置いている国語辞典に比べ、語源や歴史的使われ方など多面的に言及をしている百科事典の「私」では、次のように説明している。

私 (世界大百科事典 第2版)

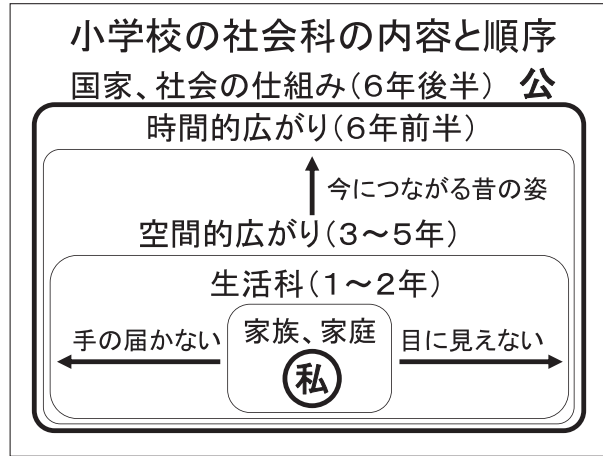
私の古字はムである。ムは、音はボウであり、意味は〈それがし(某)〉である。禾は、原意は莖つきの穀物(たとえば稲やキビ)であり、転じて穀類を総称するようになった。したがって、私の原イメージは農耕する民衆の姿である。これに対して、公(おおやけ)は、大宅、大家から、皇居、天皇、朝廷、政府、国家、社会などを意味するようになった。公共、公正、公論と私腹、私欲、私論の対比にみられるように、公がプラスの価値であり、私がマイナスの価値であるとされてきた。

この説明の最後にある、「～であるとされてきた」という説明を踏まえれば、本来は「対比」するものではないのにも関わらず、そのように「扱われていた」ことになる。そこで「扱われていない」場合の「私」と「公」の関係を、小学校の社会科教育の過程を確認する形で説明する。

図1は、小学校の社会科の教育課程を図化したものである。

³ Oxford 現代英英辞典でも確認したが、「世の中」に該当する説明はなかった。

図1 小学校の社会科教育による視野の広がり



注：小学校学習指導要領から、筆者作成。

この図1のように、小学校の社会科教育は、1～2年の生活科の授業を通じて児童の「自立」のため「私」の確認を行った後、小学校3～4年で児童の視野を自身の身の回りから日本（国家）まで広げ、5～6年は日本を公民的視点から俯瞰して見る学習が行われる。また、文科省（2017）（以下、『学習指導要領』）の指導目標の主語を比べると、3～4年では「私人」の視野を広げようとしているのに対し、5年生以降は「公民」の視点で日本国という社会を俯瞰して捉えさせようとしていることが確認できる⁴。

この説明を踏まえれば、「私」と「公」の違いは、行動などを決める際に考慮する範囲の違いであることになる。

2-2. 「世の中」という見え方と、社会の複雑化

次に、このような「私」と「公」が、なぜ対立と扱われるのか、社会を「世の中」と捉えるのかを説明する。そのため本稿では、「社会」と呼ばれる「人の集団」の「複雑化」を、「巨大化」、「多層化」、また層を成さずに混ざっているという意味での「混在化」の、三つに分けて説明する。

まず社会の「巨大化」を説明する。今日の社会、つまり「人の集団」は巨大化し、自身の経験だけでは理解することが難しくなっている。例えば、日本社会の人口は1億3千万人弱である。この状況では、国語辞典の「社会」の説明にあるような、会ったこともない人と「共同で生活」している、ということを理解するのは困難であろう。

また、人は身近な経験、体験、直接的な利害に目が向きがちになるものである。これにより、「社会」が大きくなれば、自身が所属していること、課される義務、それを怠ったことによる影響などが意識しづらくなる。また、人は直接縁のない同じ社会に属する人よりも、属さない知人との関係の方が大事と考えるものである。それでいて、このように社会の境界にこだわらなくても、自身の生活には直接的な影響が感じられないのだから、「世の中」というあいまいな捉え方が生じることになる。

このような状況を図化し、それを踏まえ社会科教育の効果を確認する。

図2左は人の知覚の範囲を、図2右は社会科教育による知覚の範囲の拡張を図化したものである。

⁴ 詳しくは、宇多（2019）の説明を参照。なお、時間的広がり説明は6年生以外でも行われている。この場合は、地域の昔の風景やその土地で活躍した人物のように、それぞれの学習段階に合わせた内容になっている。また、6年生で国連を説明するなど、他国との関係も説明している。

図2 人の知覚の範囲と社会科教育による拡張

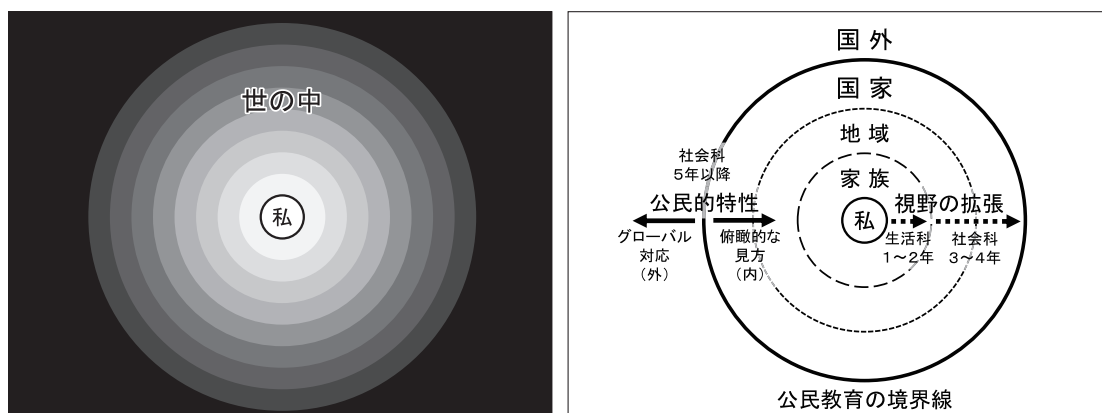


図2左は、人が自身を中心に据えて、物事を捉えていること、そして自身から遠いものは見えにくくなることを示したものである。この場合の「遠い」は物理的な距離だけでなく、興味や関心、また習得した知識などにも左右される。

これまでの説明から、社会の2番目にある「世の中」という捉え方は、所属する集団やその境界線を具体的に理解できていない場合、理解しているとしても意識や行動に反映できていない場合に生じることが分かる。つまり、自身の立場と視点だけで物事を捉え、その状況で「全体」とすべき「人の集団」の境界を意識しないのだから、俯瞰ができるはずもなく、あいまいにしか捉えられなくなる。その結果、所属についての考慮が欠ける。それにより所属していない「人の集団」から、自身の所属する「人の集団」や自身が受けているはずの排他性に目を向けにくくなる。

しかし、原始的な「人の集団」でも血縁家族ごとに住居を建てるように、「社会」というものは「多層」である。今日では、様々な社会の形態が生じたことで、さらに「多層化」が進んでいる。この「多層化」を踏まえ、小学校の社会科では、自身の体験だけでは捉えられない、家族や学校などよりはるかに大きな「社会」を捉えられるよう、段階的に教育していることを示したのが、図2右である。

この図2右のように、小学校の生活科で「私」、自身というものを、体験を通じて理解させた後に、3年生から体験だけでは理解できない「社会」を、市町村（3年）、都道府県（4年）という地域、次に国家（5～6年）と、段々視野を広げる形で理解させようとしている。そして、日本国家を意識でき、その規模で物事を捉え、考えることができる「公民的視点」を、小学校における社会科全体の目標としている。

2-3. 社会の混在化と所属の多様化

現実の社会は「巨大化」、「多層化」だけで説明が済むほど単純な構造ではない。そこで次に「混在化」、つまりきれいに層を成しているわけではなく、混ざり合っていることを説明する。

図2右で示した「私」を中心に置いた同心円的社会構造は、実際の社会構造と比べると、かなり単純化された捉え方である。このことを説明するため、図2左の構造に図2右の境界を重ねたものが図3左、これを社会関係、つまり人の関係から例として四つをあげ、それらの構造変化を説明したものが、図3右である。

図3 人の所属と複雑化（左：単純なムラ社会の関係、右：現代の関係への変化）

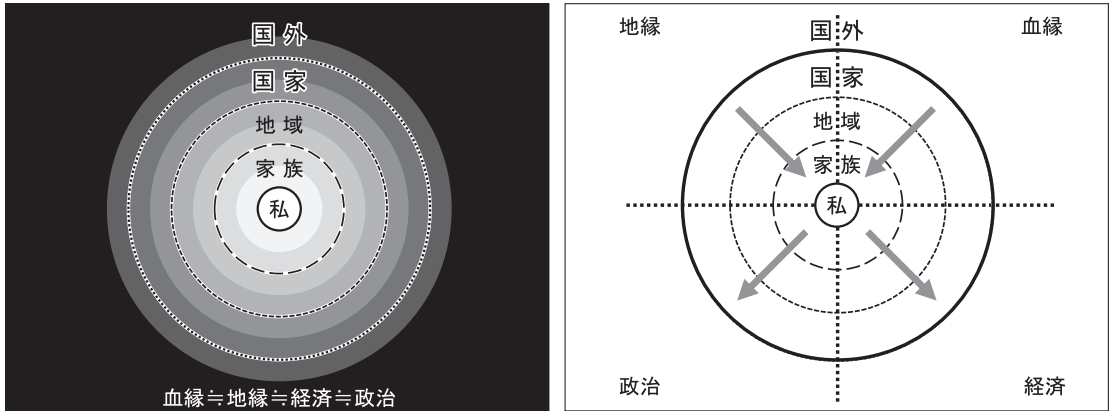


図3では社会的関係、つまり人間関係が様々であることを踏まえ、ただし図で表しやすいように地縁、血縁、経済、政治の四種類に限定した。また、この場合の「経済」は「貨殖」、つまり「金儲け」という意味に限定される。

まず、図3左の封建時代の農村のムラ社会の四種類の社会的関係は、以下のような理由で、ほぼ同じと見なせる。

地縁：田植えなどの共同作業を一緒に行うなど、村に対する依存度、また協力関係は強く、村八分などの村民による私刑（法律によらずに行われる私的制裁）が、家族単位の死活問題となる関係

血縁：血縁的、婚姻的に結ばれ、正月に親戚一同が本家の屋敷などに集まるような強い関係

経済：農業という生産手段と、村単位の自給自足度の高い生活（消費）形態

政治：「お上」に従う前提で、村の「社」という公共空間で「会」うことで行われる程度の自治

このように、四種類の社会的関係は村単位で運営されている。このことから、分類の線は引かず、図の下部に「≒」（ほぼ同じ）を使った式を示した。

これに対し、図3左は直接的に自身の生活に影響が少ないものは意識や関心が薄まることを示したものである。その結果、例えば核家族化された勤労者世帯における、勤労者本人の見え方、捉え方は、次のようになる。

地縁：近所に住む人をあまり把握していない（日中は出勤していることから、知ることも困難）

血縁：両親と別居

経済：会社から給料をもらうため、国民経済よりも国外の同業他社の方に関心が向きがち

政治：会社に及ぼす影響もあり、市政よりも国政に目が行きがち

このように「地縁」と「血縁」が希薄になる理由として、意識する必要性が少なくなったことがあげられる。つまり、サービス業の発達によって必要な時には金を払いさえすればよくなった。これにより、代わりをお願いする人を「縁」（コネ）によって確保しておく、そのため頼まれれば互いに助けあう、互惠関係を維持しておく必要性が少なくなった。

これに対し、この核家族化された勤労者世帯の勤労者としての人の、義務教育のため学校に通う子供の認識は、次のようになる。

地縁：地元の公立学校に通うため、近所と関わる機会は勤労者の親よりもある

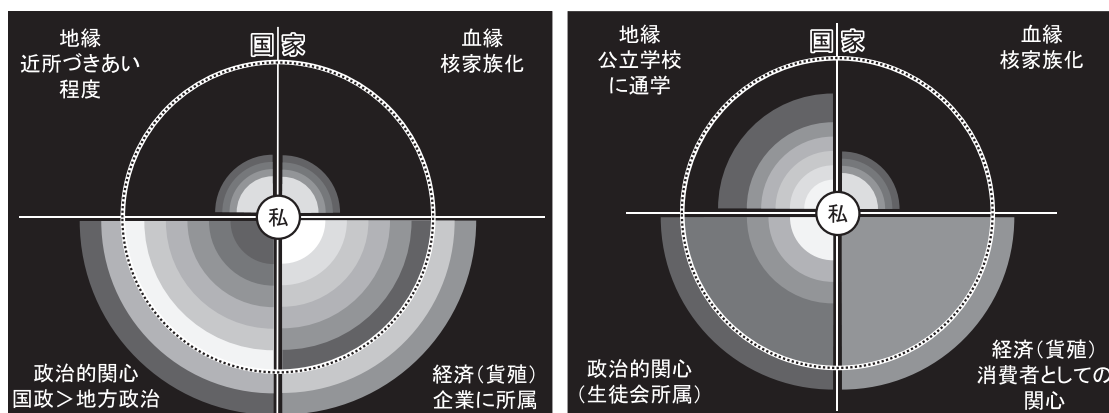
血縁：別居により祖父母とも疎遠

経済：アルバイト等はしていないため、消費のみ

政治：生徒会で学校社会での関わりはあるが、他は社会科教育やメディア等からの知識のみ

この同じ家族の認識の違いを図化したのが、図4である。

図4 核家族における、社会的関係の違い（左：勤労者、右：就学者）



このように、同じ家族という小さな「人の集団」に属していても、他に所属する社会は異なるものとなる。つまり、今日のように社会が「混在化」し、一人が多数の「人の集団」に所属し、状況によって立場が変わること、使い分けを、意識的、無意識的に行なっていることになる。

このような所属の違いにより、それぞれに課せられる権利と義務は、人によって大きく異なるものとなる。このように人たちが、入り混じる多数の社会に参加し、それぞれの状況に応じて立場を変えながら、その時の「公」を使い分けなければならない。このような「社会」の状況を直視せず、「みんな」、「世の中」という曖昧な表現で済ませていれば、「人の集団」の定義を意図的にすり替えられたとしても、気づくことは困難になる。

2-4. 「利」と「益」の違い

次に、これまで見てきた社会の複雑化、つまり「巨大化」、「多層化」、「混在化」を踏まえ、次に「利」と「益」の意味を確認する。今日では「利益」という表現にまとめられ、「個人の利益」という使われ方もしているが、熟語だけでなく、漢字に分けてそれぞれの意味を確認すると、次のようになる。

利益（りえき）（大辞林）

1. もうけ。得。収入から費用を引いた残り。利潤。⇔損失。
2. 役に立つこと。ためになること。→りやく（利益）

利（大辞林）

1. もうけ。利益。
2. 都合のよいこと。役に立つこと。
3. 優勢であること。
4. 利子。利息。

益（大辞林）

1. 人や世の中の役に立つこと。ためになること。⇔害。
2. 利益。もうけ。⇔損。

これらの、どの説明にも共通してある「もうけ」の意味を確認すると、次のように説明されている。

もうけ（大辞林）

もうけること。もうけたもの。利益。とく。

このように「利益」の意味を確認すると「もうけ」とあるのに、「もうけ」の意味を確認すると今度は「利益」とある、という循環の関係がある。これでは説明にならないので、『経済辞典』を使って「利益」を確認する。

利益 profit ; income（経済辞典）

企業活動の成果のこと。現行の企業会計では、期間計算を前提として、1会計期間における経営活動の結果実現したすべての収益とそれに対応する費用との差額として算定された当期純利益を指す。この意味での利益は、当該期間における経営業績の指標であるとともに、配当や税金の形で分配しうる金額の指標でもある。

このように、『経済辞典』では企業活動に限定し、「収益とそれに対応する費用との差額」としている。しかし、日常用語では、それ以外の「人の集団」また個人単位の活動に対しても使われ、「都合」や「優勢」といった心理的なものも含まれている。そこで、これらの説明を合わせ、本稿では「利」と「益」を区別し、心理的な「都合」と「優勢」を含めた観念を、ひらがなで「もうけ」と表すことにする。これにより、ミクロ経済学の「効用」も「もうけ」に含めて扱えることになる。

また、「益」は「人や世の中の役に立つ」と当事者以外の対象を示している。これに対し、「利」には「都合の良い」、「優勢である」とあるように、相対的な部分がある。このような説明を踏まえれば、「利」と「益」の違いは、「もうけ」を受ける対象の扱われ方になる。

つまり、「益」は同じ「人の集団」に属する他の人にも与えるものである。これに対し、「利」の心理的な「優勢」を確保するには、他集団に対してだけでは済まず、集団の中で他の所属者よりも多い、自身が相応だと感じるだけの「もうけ」もなければならぬことになる⁵。

2-5. 立場の違いによる捉え方の違い

次に、これまでの説明を踏まえ、ある人にとって共に「公」であるものの対立が、別の人によって「私」と「公」の対立と扱われることを説明する。

図5は、それぞれ立場の異なる人が、「私」と「公」をどのように区別するかを示したものである。

⁵ 説明の通りに「利」と「益」を使い分けるのならば、私利と公益はあっても、「私益」はないことになる。

図5 立場による「もうけ」の見え方の違い

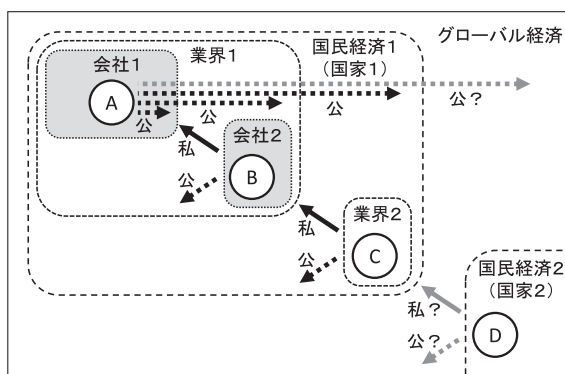


図5の丸は「私」を表し、丸から出ている矢印はその先にあるものの扱い方を示している。この矢印が実線の場合は「私」、点線の場合は「公」と扱っていることを指す。これまでの「私」と「公」の説明を踏まえれば、集団にとって「都合のよいこと。役に立つこと。」が私的な「利」であるか、公的な「益」であるかは、その恩恵を受ける集団を「全体」と扱うか、より「大きな集団の一部」と扱うかによって変わることになる。

この関係により、図5のAという「私人」の視点で見ると、Aにとって「会社1」、「業界1」、「国家1」は、全て「うち」つまり「公」になる。しかし、Bから見れば「会社1」は、またCから見れば「業界1」は「よそ」であり、自身には「益」をもたらさない「私」になる。

この状況で、例えば「会社1」が、会社ぐるみで「もうけ」を追求した結果、法に反し「国民経済1」の「益」を損ね、会社が摘発、社長を始めとする多くの人が逮捕されたとする。これはAにとっては「公」と「公」の対立となる。そして「会社1」には所属していないBとCからすれば、会社という「国家1」や「業界1」の一部でしかない会社の「私利」を優先し、「公益」や、BとCそれぞれの「私利」を損ねたことになる。

この「多層化」の状態で、「混在化」が加わると、さらに把握が難しくなる。例えば、Dから見れば「国家1」は「よそ」なので、「会社1」の問題には関係ないはずである。しかし、この状況で「会社1」が自国の会社と関係が強い場合、自国の「益」を損ねるものとして、「国家1」に対し、例えば「グローバル化の時代、自由化という流れに反する、時代錯誤な閉塞的な国家主義に基づいた横暴である」などと、批難するであろう。

この例は、「私」と「公」の区別は相対的なもの、端的に言えば「ご都合」であることを示している。つまり、実態はどうあれ、そのように主張し、周りにそう思わせることができればよく、「言ったもの勝ち」ということが起こりうる。このことは、「益」について語る際は、「公」つまり「人の集団」をきちんと定め、省略せずに説明し、すり替えるような言動があれば、それを止めなければ、無意味どころか混乱を生むことを示している。逆に、ある「公」にもたらす「益」を考えさせないようにするには「みんな」、「世の中」といった曖昧な表現を使い、集団の境界を把握させないようにすればよいことが分かる。

3. 「グローバル」と「国家」を対立とする心理

3-1. 「グローバル化」の意味

ここまでは、日本国内の社会が「多層化」、「混在化」し、「公」と「私」、「利」と「益」が人によっ

て異なる、複雑な状況にあることを説明してきた。次に、これまでの日本社会内の複雑性に加え、国外が加わる「グローバル化」を加え、「公」と「私」の対立を逆転させる方便があることを説明する。

まず、『学習指導要領』は、小学校社会科の目標として、次のことを記している。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

この説明を踏まえ、まず「グローバル化」(globalization)、また「グローバル」の意味を確認する。

グローバリゼーション globalization (大辞泉)

国家などの境界を越えて広がり一体化していくこと。特に、経済活動やものの考え方などを世界的規模に広げること。グローバライゼーション。

グローバル global (大辞泉)

世界的な規模であるさま。また、全体を覆うさま。包括的。

これら二つの表現を並べたのは、「化」の使い方に注意が必要なためである。「化」は、『漢字海』(漢和辞典)によれば「もとの状態から異なっていく」という意味がある。この「化」を変化前や変化後と同じと扱うか、異なるものと扱うかは、対象によって異なる。例えば、これまでの社会の「多層化」、「混在化」の場合は、変化前の単純な状態と同じとして扱えば、複雑になっているという「変化」を理解する妨げになる。一方、変化後の状態と同じに扱っても程度の問題でしかなく、同一視しても大きな問題にはならない⁶。

これに対し、「グローバル化」の「化」は、「化」を取り除いて同一視してもよいものではない。「一体化」が終わったものは「一体」であり、この使い方では日本を含めた国家を、一括りにして扱うことになるからである。つまり、日本とグローバルを対の概念として扱うということは、各国の主権を無視し、また各国の事情、文化などの多様性を無視し、日本以外の「よそ」を一括りに扱い、かつ日本はそれに含まれていないものと扱っていることになる。しかし、「社会」の意味で示したように「よそ」と「うち」は違うものであり、「よそ」という表現で一括りにされた他の人たちにも、それぞれの「うち」がある。「家族」という「うち」の外にある「よそ」の家が一つではないように、国外にはたくさんある国がある。

しかし、今日のグローバル化の進行段階では、世界規模の「一体」、「包括的」と言えるような「人の集団」、つまり互いの生活を保障し合い、そのための制度や組織が確立しているものはまだ存在していないはずである。このことを確認するため、「グローバル」と「社会」の意味を比較する。まず「社会」の1番目の「共同生活」をしている、とするのは無理であろう。次に、3番の「他から区別される」には、例えば宇宙人と関係を持たないと無理であろう。また、「仲間意識をもって」いるとしても、限定的でしかないはずである。これらのことから、このような「社会」は、せいぜい2番の「世の中」程度、つまり曖昧な見方をすることでしか成立しないものであることが確認できる。

次に、『学習指導要領』の目標にある「グローバル化する国際社会」への対応が、「際」の内と外では方法が異なることを説明する。確認になるが、「国際」(International)の「際」とは境界のことであり、

⁶ 他に、「考え方などを世界規模に広げること。」という説明がある。このような説明が成立するには、まず特定の考え方があり、その価値観を持たぬ人に押し付けがされることになる。

「Inter」とは「間」のことである。この意味を踏まえれば、「グローバル化する国際社会」とは、国境をまたいだヒト・モノ・カネの動きが以前よりも増えるという「一体化」により、これまで存在していた国境を挟んだ「うち」と「よそ」の違いが、以前よりは少なくなった、という意味になる。

このことから「グローバル化」への対応とは、これまでの説明を踏まえれば、「よそ」の人と「ど」のように関わっていくかになる。そして、それは所属する「人の集団」の「際」の内側か外側かで違ったものとなる。つまり、「際」の内側の「グローバル化している日本社会」では、「よそ」の国から来た、多くの点で異なっている人とどのように接するかを、「うち」の人達で決めるということになる。

一方、「際」の外側の「グローバル化している、日本の国外の社会」は、「グローバル化」により、違いは少なくなっているとしても、それぞれの言語、文化、慣習を持っている。これらの違いにより、「うち」で採られている方法が通用しないことになる。

つまり、これまで確認してきた語句の意味を踏まえれば、「グローバル」と国家の対立の構造は、「社会」を「世の中」としか捉え、「グローバル化」と「グローバル」の区別をせず、「よそ」が「一体化」を済ませたものと、同一視することによって成立していることが分かる。また、「グローバル」に日本を含めず、「うち」(日本)と「よそ」(グローバル)という対立軸で語るのは、「私」と「公」を対立するものと扱う場合と、同じ単純化がされていることが分かる。

また、この方法は「うち」を批判する際に使われることが多いことから、「内向き」の方便であり、児童が「うち」の中で「みんな」、「他のうち」といった表現を使う場合と同じ、都合の悪いことを「見ないこと、無視すること」でしか、成立しえないことが分かる。

3-2. 「効用」をもたらすための「方便」の仕組み

次に、「グローバル化」によって、先の例である「会社」と「国家」という「公」の対立の関係がさらに複雑になることを説明する。

ここでは、会社という「公」や、そこに所属する「私」の方が、グローバルに対し貢献している分、「国家」などという閉鎖的な「公」よりも重要と位置付けるといった、「利」の3番目「優勢であること」、「優位性」を用いた方便を説明する。

この「優位性」とは、精神的、気分的なものであり、ミクロ経済学の「効用」がそれにあたる。つまり数値化し、その大小で測ることが困難という厄介なものである⁷。

効用 utility (経済辞典)

消費者が財やサービスの消費から得る満足をいう。経済理論においては、消費者は、一定の予算制約のもとで、各自の主観的判断に基づき総効用を最大にするように、各種財・サービスの間で支出を配分するものと仮定される。

この『経済辞典』の説明は、消費行動に限定されているが、実際は自身の行動によっても精神的な「優位性」を得ることができる。

そこで、このような精神的な「優位性」を誇る際に取られる、「マウンティング」と呼ばれる行為を紹介する。まず、「マウンティング」の本来の意味は、次のとおりである。

マウンティング mounting (大辞林)

サルがほかのサルの尻に乗り、交尾の姿勢をとること。霊長類に見られ、雌雄に関係なく行

⁷ このような精神的なものに依るのは、ミクロ経済学の「効用」理論を踏まえたものである。なお、ミクロ経済学における「効用」の把握の論争に参加するものではないため、「困難」としておく。

われる。動物社会における順序確認の行為で、一方は優位を誇示し他方は無抵抗を示して、攻撃を抑制したり社会的関係を調停したりする。馬乗り行為。

この説明を踏まえ、本稿では何らかの形で、人が自身の「優越感」を得ることを目的とする行為を「マウンティング」と表現する。

次に、この「マウンティング」によって、大きい「公」と、それに内包される小さな「公」、実は「私」の序列を入れ替えるレトリックがあることを、同じく会社と国家を例に、図6を使って説明する。

図6 マウンティングによる優位性の確保（変更）

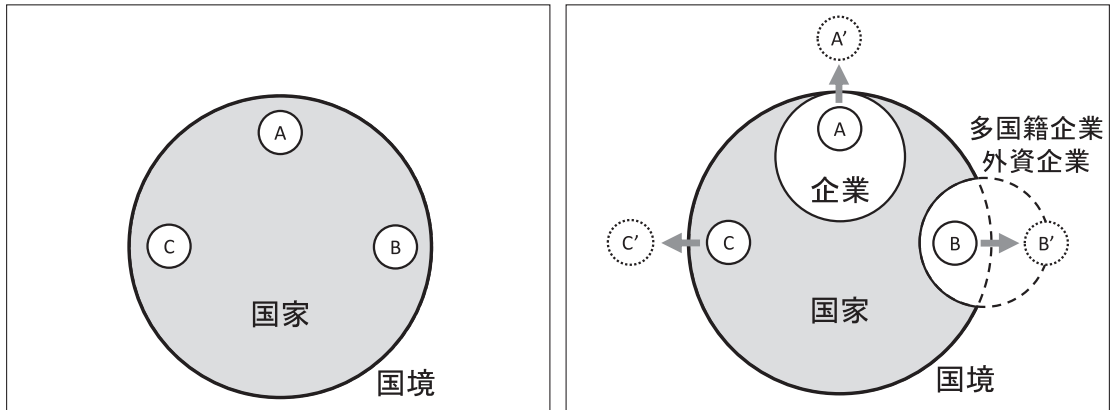


図6左は比較のため、「国家」に所属する人という性質のみを示したものである。これに対し、図6右は同じ状態で、会社という「人の集団」と「国家」との関係が、両方に所属している人に与える影響を示したものである。また、「'」は、集団内の自分以外の人に対し「優越感」を得るために、自身「本当は」立っている（はず）、ということにした位置を示したものである。

まず、Aは国内の企業に所属している場合を示したものである。A'は、状況によって、国家や自分以外の国民よりも上位に、自身の立ち位置をシフトさせた状況を示している。この場合、会社は完全に国家に内包されている。しかし、「この会社に所属している自分は特別な存在」という「マウンティング」によって、他の会社に所属していない残りの国民たちよりも、自身を上位に位置づけている。この根拠は「会社」である必要はなく、学歴、血筋、出身県、信仰など何でもよいのである。

次に、Bは外側への所属という、Aより分かりやすい立場が加わったものである。例では多国籍企業や外資企業のように、国家に一部しか内包されていない場合を示している。Bの場合は、言わば「人の集団」の外に片足を出しているようなものなので、Aの場合よりも自信を持ってふるまうことができる。これは国境線をまたがるか外側にある集団に所属する、あるいは何らかの関係を持つだけでも成立する。例えば海外旅行に行った、外国人が知り合いにいたといったことでも十分可能である⁸。

「C」は、実は根拠などなくても、自身は国家の外側にいると自称さえすればよいことを示している。これを鹿島（2016a）は、小林秀雄の論理展開の方法を例に、次のように説明している⁹。

ようするに、「『花』の美しさ」を知るほうが、「美しい『花』を知るよりもはるかに簡単なのだ。なぜなら、「美しい『花』」はだれでも見えるが、「『花』の美しさ」なんてものはだれにも見えないからだ。だれにも見えないがゆえに、おれには見えると言った人間の勝ちなのである。

⁸ このようなマウンティングは、「～では」という表現が用いられることから、「出羽守」と呼ばれる。

⁹ 鹿島（2016a）、p. 88～89。

(略) 小林は、自らの言葉とは裏腹に、そのだれにも見えない『花』の美しさを勝手につくりあげておいて、それを「美しい『花』」とすり替え、ああだこうだと論じることの方を好んだのである。なぜなら、実体の理解よりも観念の理解の方がよりイージー・ゴーイングだからである。

このような「方便」により、国家よりもはるかに小さく、より排他性が強く、「もうけ」することに特化した組織である会社の「益」や、それに属する、あるいは味方することで得られる個人の「利」、また「優越感」のための行動である実態を、煙に巻くことができるのである¹⁰。

3-3. 「私」を「公」に見せかける「方便」

このような行動の結果、図5で示した関係は、図7左のように変化する。

図7 「グローバル」など自称に依る立場の擬態

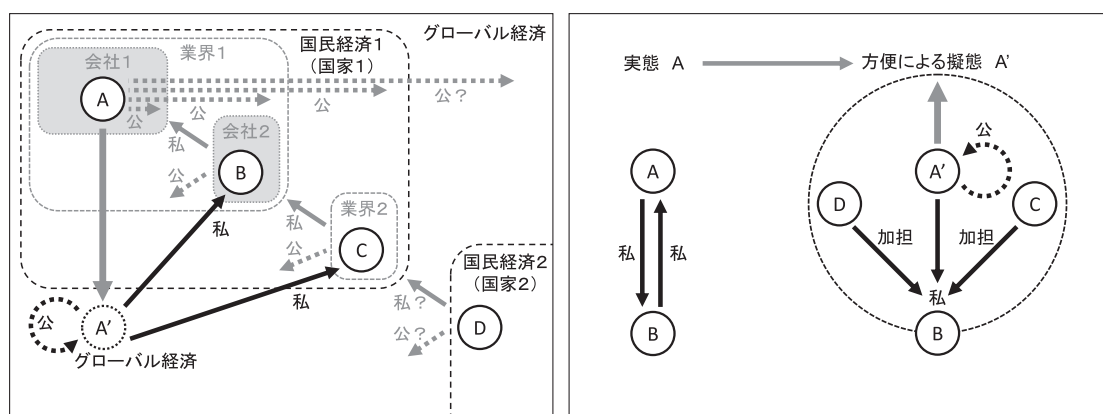


図7左を図5でと比較すると分かるように、Aは自身を「方便」により「国家1」の外、A'にいるものと定めてしまう。そして、A'という実態と異なる立場から、グローバルという「公」に反するBとCを「私」と位置づけ、グローバルの側にいるA'という自分の方が、「業界」や「国家」などという狭く小さい、閉鎖的な「私」の集団にしがみついているBやCよりも「正しい」とするのである。

このような「方便」により、Aは「グローバル」という「一体」ではないはずの「人の集団」を作り上げ、自身をA'として「国家」の外側に位置付け、「国家」よりも広い範囲に「益」（人や世の中の役に立つこと。ためになること。）をもたらしているという立場を装うことができるようになる。

これを一般化したものが図7右である。図7右は、Aが「私」でしかない自身を、広い範囲を覆うA'という「公」を騙ることで、同じ「私」のはずのBが「公」に反しているかに見せかけることができる。これに対してCやDは、自身がBに代わって攻撃対象にされることを恐れてか、Bに何らかの負担や責任を押し付けることができるからか、Aと共にBを「私」とラベリングし、批難することに加担する。この加担が、CやDの直接的な「利」にならないとしても、Bに負担を押し付けると同時に、「公」に協力しているという口実により、「精神的優位」を得ることができる。つまり、このような対立は、一見「私」と「公」の対立のようであるが、実態は「公」を僭称する、つまり「公」を騙った「私」による、他の「私」への攻撃でしかないことが分かる。

このように、この手の「方便」は、より大きな「公」を騙り、他の人や集団の「私」や「公」を、

¹⁰ この類の話は、日本人論や精神分析の書で、分析されている。本書では直接引用や紹介をしていないが、多くの本を参考にした。その一部は、参考文献一覧で紹介した。

「小さい」、「狭い」、「閉鎖的」、「短絡」などと、誹謗することによって成立している。この方法は、「みんなのため」、「世の中の役に立つ」といった曖昧な表現だけでも成立させることができる。つまり、この方法はグローバルと国家に限らず、国家とその一部である特定の地域、ある産業界とそれに属する一会社、近所の組合に対する一族といった関係でも使われているものでしかない。また、この方法は、恣意的な情報の操作や単純化、極論化によって成立する「方便」でしかない。

3-4. 本来の意味を無視した用語の使用

経済的な「利」を追求するために「方便」を用いる場合は、ミクロ経済学の基礎理論が利用されることが多い¹¹。ミクロ経済学の基礎理論は、18世紀の単純な社会や経済の構造を基に、単純化した状況を想定し、その後の変化を無視したものである。これにより、「ミクロ」という名前が示す通り、ミクロな個人を「うち」とし、残りは全て一括りに「よそ」、「世の中」と扱うなど、「方便」に使いやすい構造になっている。

このような単純化のためか、語句が使われた時点の認識からかけ離れた、誤解を誘う使われ方が、古典の権威を用いてされることが頻繁にみられる。例えば「神の見えざる手」、「小さな（安価な）政府」、「政府の失敗」、「夜警国家」といったものがあるが、これらは宇多（2019）で『経済辞典』を使って示したように、本来の意味とは似て非なる使い方がされている。また「仮説」なのに、普通の「法則」として用いる「絶対化」もよくされている。

このような先人の言葉の一部を誇張し、改変している例として「神の見えざる手」と、本来の「見えざる手」の意味を比較する。この表現を用いたスミスは、「見えざる手」が機能する条件に「国内の産業を維持する」、つまり国内で生産し、人を雇用することを示していた¹²。これに対し、「神の見えざる手」を用いた説明は、成立条件を隠して「見えざる手」の範囲をグローバル経済にまで広げること、一部の人たちのために都合よく規制をかけまくった不自由で閉鎖的な国民経済から「解放」され、自由なグローバル経済の方が重要、とする「方便」に使いやすく加工されている¹³。

つまり、このような意味で用いるのであるならば、まずはスミスの見解を否定し、それとは異なる「神の見えざる手」が、グローバル経済では機能することを示す必要がある。それを怠れば、スミスという経済学の権威を利用しながら、その見解とは異なる説明を正当化していることになる。

このような方便に共通するのは、考えさせるだけの情報を与えず、「専門家による学術的な理論」といったもので、聞き手の「専門家ではない」という自信の無さと、立場をわきまえる謙虚さに乗じて状況把握ができないようにするか、自身の都合に合わせて誘導しているのである。そのため「結論ありき」でその正当化に必要な説明しなせず、その不足に対して説明を求めると、補足することを、「参加するだけの知識のない人」、「時代遅れ」などの言葉で貶めることで、説明責任を果たさずに済ませてしまう。このようなことから、対話を拒否され、二極化、断定調、煽動的といった方法が採られ、同調圧力を受けていると感じたら、まず疑うべきであることが分かる。

このことから、「グローバル」の対語として使われる「国家」、「滅私奉公」などの言葉を用いる時の「私」など、対立の関係と決めつけ、片方を責めるために使われる用語は、本来の意味と異なる使い方をした「罵倒語」であることが分かる。このような「罵倒語」を、オーウェル（1944）は「ファシズム」を例にあげ、各立場の多様な使い方を一通り解説した後、「無意味である」としている¹⁴。

¹¹ この単純化、極論化は、人が理論構築を行う際に不可欠な作業であり、これを否定するものではない。本稿が問題にするのは、「利」を得るために、極論をそのまま現実の評価に持ち込み、現実から目をそらさせる行為である。

¹² スミス（1789）、p.119～122。この解説については、宇多（2018）を参照。

¹³ 通常なら「開放」を用いる部分であるが、方便の意図を踏まえれば「解放」が適しているため、こちらを用いた。

¹⁴ オーウェル（1944）、最後から三段落目から最後まで。青空文庫からの引用のため、ページ番号を示せない。

これらの例を見れば、「ファシズム」という語がほぼ完全に無意味だとわかるだろう。(略)「ファシスト」という単語は酷く濫用され、これが語義に近いところまで来ている。(略)現時点で我々にできることといえば、この語を細心の注意を払って用い、巷間見られるような罵倒語のレベルに墮さしめないことのみである。

この説明は、「ファシズム」の部分に「国家」、「国粋主義」、「経済右翼」、「内向き縮み志向」、「市場原理主義」、「拝金主義」などを当てはめても通用するものである。このような、「罵倒語」が用いられた場合は、自身の立場に関係なく正す必要があろう。むしろ、自分の主張に沿う内容を、このような「罵倒語」でもって正当化されている場合は、結果的に自身の主張が貶められているのだから、率先して正さなければならないはずである。

3-5. 専門の高度化がもたらす教養への無理解

このような「方便」を見抜くには、情報を集め、集めた情報を基に考慮し、判断できるようになる必要がある。しかし、そのように心がけても、人にはマイクロ経済学が仮定し、拠り所とする「完全情報」のような、情報を全て把握する能力はない。また感情により論理展開を妨げられ、「専門家」などの「マウンティング」に屈してしまうものである。これを減らすため、先人が積み上げてきた、知識や知恵を習う「教育」を受け、また自ら「学び、問う」ことが必要になる。

日本の近代的な教育論としては初期の本であろう、福沢・小幡(1872)は「学問」と日本における「経国済民」の関係を、次のように述べている¹⁵。

かかる愚民を支配するにはとても道理をもって論すべき方便なければ、ただ威をもって畏すのみ。西洋の諺に「愚民の上に苛き政府あり」とはこのことなり。こは政府の苛きにあらず、愚民のみずから招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上には良き政府あるの理なり。ゆえに今わが日本国においてもこの人民ありてこの政治あるなり。仮りに人民の徳義今日よりも衰えてなお無学文盲に沈むことあらば、政府の法も今一段嚴重になるべく、もしまた、人民みな学問に志して、物事の理を知り、文明の風に赴くことあらば、政府の法もおまた寛仁大度の場合に及ぶべし。法の苛きと寛やかなるとは、ただ人民の徳不徳によりておのずから加減あるのみ。人誰か苛政を好みて良政を悪む者あらん、誰か本国の富強を祈らざる者あらん、誰か外国の侮りを甘んずる者あらん、これすなわち人たる者の常の情なり。今の世に生まれ報国の心あらん者は、必ずしも身を苦しめ思いを焦がすほどの心配あるにあらず。ただその大切な目当ては、この人情に基づきてまず一身の行ないを正し、厚く学に志し、博く事を知り、銘々の身分に相応すべきほどの智徳を備えて、政府はその政を施すに易く、諸民はその支配を受けて苦しみなきよう、互いにその所を得てともに全国の太平を護らんとするの一事のみ。今余輩の勧むる学問ももつぱらこの一事をもって趣旨とせり。

この「学問」という手段が「全国の太平」、つまり日本における経国済民という結果につながるという因果関係が成立するかは、スミスの「見えざる手」に成立条件があるように、条件次第である。つまり、成立する条件から外れれば、先述の「私」と「公」が対立する、と捉えられてしまうように逆効果となることもありうるのである。

¹⁵ 福沢・小幡(1872)、最後の段落。青空文庫からの引用。

この場合の条件を確認するため、小学校から大学までの教育機関における教育によって、人が得るはずの知識の構造と、教養と専門の関係を図化する。

この図8左は大学教育で学年が進むにつれ変わっていく内容を、図8右は義務教育以前の家庭における躰から大学の卒業論文までの学びの成果、身に着けた知識の構造を図化したものである。

図8 大学教育の内容と教育による知識の構造 (左：大学教育の流れ、右：教育で構築される知識)

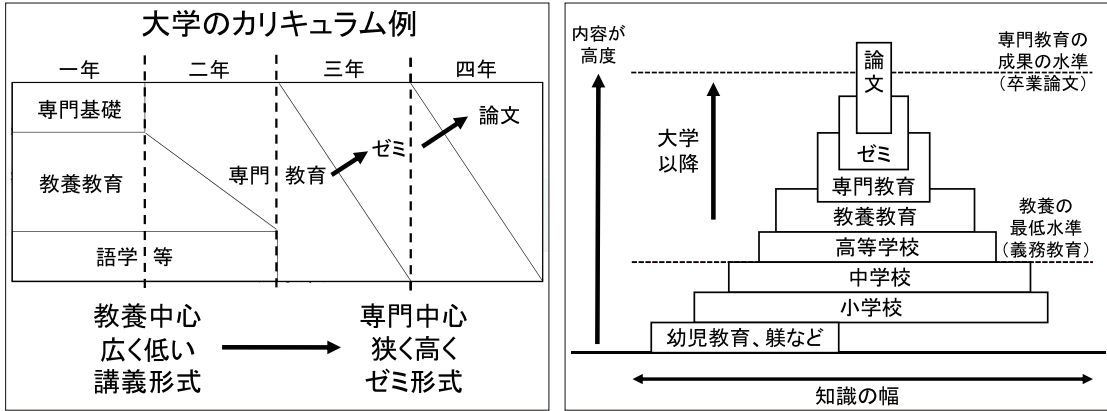
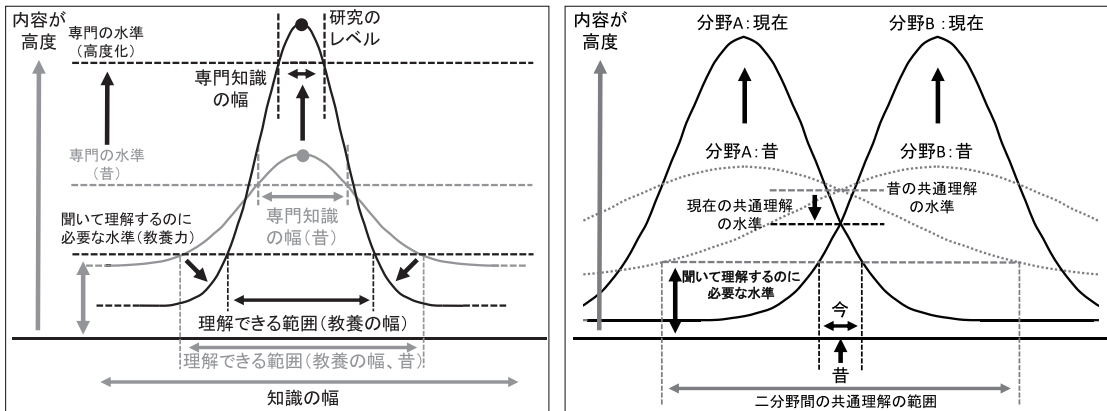


図8右で「幼児教育、躰など」が義務教育からはみ出しているのは、公民教育とは異なるものがあることを示している。この部分に、「よそ」の国の教育内容が当てはまることがあるのが、「グローバル化」である。つまり、「よそ」から「うち」に来た、日本の学校に通う日本国籍を持たない人達には、彼らの「うち」(社会)のやり方があるため、彼らにとっての日本の教育は「日本にいる場合」という条件がつくものになる。

この図8右を簡略化して、変化を説明できるようにしたものが、図9である。

図9 専門分野の高度化と狭窄化、それによる他分野への無理解化



注：鹿野 (1990)、p. 9 の図を基に、筆者作成。

図9は、鹿野 (1990) が「情報過多と知識のマニア化」を説明に用いた図を参考に、縦軸に人が得る知識のレベルを、横軸に知識の多様性を取り、大学 (University) の教育によって得られる知識を図化したものである。

図9左は、知識の山が、専門分野の高度化によって生じる変化を示したものである。知識の高度化によって山が高くなると裾が狭まるのは、一人の能力に限界があり、内容を高度化する代わりに、専

門以外の理解に費やす時間を削らなければならないからである。一方、図9右は、このような高度化により、専門家の他の領域への関心と理解力が失われていくことで、互いに無理解になることを示したものである。このように、知識の幅が狭くなれば、他の領域への理解は損なわれ、また共通理解の水準も低まることになる。つまり向上という目的のために、互いの理解がしにくくなるのである。

3-6. 分野の優位性誇示への対応方法

この状態で、先ほどのマウンティング、精神的な「優越感」の確保を目的とした行為が加わると生じる、教育現場における問題を説明する。

まず、この問題を端的に説明するものとして使える、ことわざを紹介する。

群盲象を評す (大辞泉)

《多くの盲人が象をなでて、自分の手に触れた部分だけで象について意見を言う意から》凡人は大人物・大事業の一部しか理解できないというたとえ。群盲象を撫ず。群盲象を摸す。

これまでの説明を踏まえれば、ことわざの言う「群盲」とは、科学を高度化させるために必要な「分業」がもたらす他への無理解と、人の「優越感」を追求する行動が合わさったことによるもの、つまり人の進歩の副産物ということになる。このことから、この副産物による弊害を防ぐためには、互いの分野への尊重、必要な情報の交換、その作業の結果として得られる相互の理解が必要であることが分かる。これを、ことわざの説明にある筆者などの「凡人」がなすには、経験や体験だけでは捉えられない部分を理解するための手段が必要であり、それが「教養」教育である。

教養 (大辞林)

1. おしえそだてること。
2. 社会人として必要な広い文化的な知識。また、それによって養われた品位。
3. 単なる知識ではなく、人間がその素質を精神的・全人的に開化・発展させるために、学び養われる学問や芸術など。

この教養教育をする際、大学における教養教育科目専門科目の対立を示したものが、図10である。

図10 教養教育の否定と専門分野の非実学化の原因

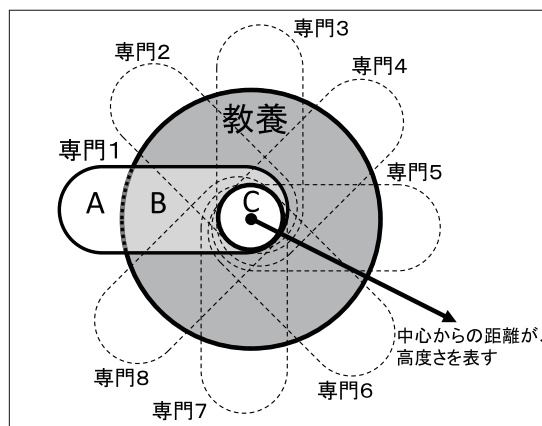


図10左は、領域の異なる専門家が互いを理解して協力するか、否定して対立するかによって、「教養」として大学が提供できる範囲が変わることを示したものである。

図10左は、円の中心点から遠ざかるほど、内容が高度化するものとしている。また、「教養」は包括的であるため円で示し、一つの専門は限定的であるため細い棒で示している。また、専門1の実線と専門2～8の点線の重なりは、総合大学（University）が様々な学部を持ち、それぞれの専門分野を教え合えば、教養の多くを補い合い、教育できることを示している。

これを踏まえ、「専門家」が自身の領域に対して過剰な自信を持ち、「マウンティング」を行なった場合、教養教育はないがしろにされることを示す。例えば、専門1に属する教員は、高度な領域Aだけが大学で教えるべき領域で、領域Bと領域Cは本来なら大学で教えるようなものではない、と考えているとする。同様のことを、他の専門2から8の教員も考えた場合、互いの専門分野で教える内容を否定しあい、教養教育として教えるべき基礎的部分を潰しあうことになる。

その結果、教養科目として存在意義があるという合意が取れたとしても残るのは領域Cだけ、それも本来ならば大学で教えるような内容ではないが、という条件付きでのこととなる。これにより、専門1に関係することは、AとCしか教えないのだから、Bという連結する内容を欠くことになる。これにより、Aという専門的知識が地に足つかないものになってしまう。

一方、福沢・小幡（1972）では、学問は「実学」であることを、次のように説いている¹⁶。

されば今、かかる実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合いの仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条ははなはだ多し。地理学とは日本国中はもちろん世界万国の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。

この説明から、「実学」は、先ほど問題にした、「地に足が着いている」ものであるべきであることが分かる。しかし、今日の高度化した専門分野は、門外漢が容易に理解できるものではなくなっている。一方で、国民や社会人として振る舞うため、分野外の凡人もある程度のことを知っておく内容も増え、また高度化している。このような「専門家」と一般市民が持つべき心得を、冒頭に用いたリンゼイ（1935）は、以下のように説明している¹⁷。

わたしたちにとって必要不可欠のことでありながら、同時にもっとも難しい事柄は、それぞれの領域における玄人の専門的知識と、一般市民の持つ共同生活についての経験と理解とを、結びつけることであります。専門家は輿論に対して敏感でなければなりません。

一般のひとびとは、専門家によって出された諸提案の意味するところをいく分でも理解して、それについてなんとか討議するのではありません。ですから、民主主義は教育ある民衆あって、はじめてその成功を収めることができるのです。

¹⁶ 福沢・小幡（1872）、四段落目。青空文庫からの引用。

この前の段落で、「その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ」ため不要とした例をあげているが、当時の時代性が反映されたものであるため、引用を控えた。ただし福沢・小幡（1972）では、これらの学問でないとした例に対しても、「おのずから人の心を悦ばしめずいぶん調法なるもの」という意義をあげ、程度の問題としている。つまり文面は固く、厳しいが、本稿が問題とする、極論や断定調によって全否定する説明はされていない。

¹⁷ リンゼイ（1935）、p. 156。

この説明から、専門分野が高度化により、一般市民とりわけ教育を受ける者がついていけない難解なものになっていたら、説明方法を工夫し、地に足がついている「実学」にしなければならないことが分かる。そのためには、まず「専門家」が排他的になり、優位性を誇ることで説明を怠けるようなことをせず、一般市民が「なんとか討議」できるよう、「教養」としての説明もできるよう、努力する必要があることが分かる。ただし、その場合は専門知識の習得を、わかりやすくするのではなく、「人間普通日用に近き実学」として説明しなければならない。

特に人文社会科学は、「実学」でなければならない要素を持つものである。一部の人が習得していればよい技術的な内容やその前提となる専門的知識、また普遍の自然法則を対象とする自然科学系については、「一般の人々」は、実際にその知識を使うことは少ないであろう。そのため、概観できればよく、その理解が実用に耐えないとしても問題になることは少ないはずである。しかし、人の考えや人間（じんかん）の約束事を対象とする人文社会科学系の理論は、「一般の人々」の考えやその人たちが営む社会の常識などに基づいたものである。教育は、このような思想や常識を根本から変える力を持つ。そのため、定義を曖昧にした単純化された極論である専門分野の基礎知識を、そのまま教養としてしまうことには、慎重にならなければならない。また、専門的知識を「方便」として用い、特定の「利」のために説明を歪める行為に対しては慎重に、厳格になるよう努めなければならないのである。

まとめ 方便が学問にもたらす影響

本稿では、社会科における経済教育で重要な用語の意味を確認し、状況の変化に合わせた理解をする作業を行なった。これにより、小学校社会科で目標でも取り上げられている「グローバル化」への対応は、これまでの教育では困難な、特殊なものではないことを示した。その一方で、社会を「世の中」と捉えて境界を曖昧にし、人を「みんな」で一括りにするなどした上で、「グローバル」と「国家」、「公」と「私」といった片方に内包しているはずの関係を対立と位置付ける「方便」が、理解の妨げになっていることを示した。

確認になるが、本稿で問題にしたのは「グローバル化」のような社会の構造変化自体ではなく、自身の「利」のために「方便」を用いることで、「グローバル化」のような状況や変化に対する理解を妨げるような「行為」である。この説明のため、本稿では「私」、「公」、「利」、「益」など、基本的な用語の意味を、あえて冗長と批判される慎重さで確認した。特に、「もうけ」の説明は、慎重に行い、ミクロ経済学の基礎理論に倣い、金銭的な「利」と精神的な優越感である「効用」に注目した。

人は、「効用」が意味する「気が済む」という感情が満たされないからか、自身を上位と位置付けようと安易な「マウンティング」に走り、議論にならない状況を作り出そうとすることがある。一方、専門教育が高度化することで、視野狭窄を余儀なくされ、他分野の存在や他分野とのつながりが軽視されるようになり、「方便」が学術的な装いを取りやすくなっている。これに加え、社会構造も「巨大化」、「多層化」、「混在化」など複雑化している。これらのことから、「学問」の目的である「独立」、また社会科が目的とする、「社会の形成者」である「公民」の育成も困難になっている。また、これらが絡み合うことにより、理論とそれを都合よく使う「方便」の区別がしにくくなり、このような説明の問題点を見抜くことが困難になり、また問題であることを人に説明し、理解させることはさらに困難になってしまっている。

しかし、本稿で示したように、複雑化されて見えにくくなってはいるものの、社会的活動つまり人間（じんかん）の活動であることに変わりはない。例えば「グローバル化」への対応とは、「国外という『よそ』に行く機会、また国内という『うち』に『よそ』から来る人が増え、関わる機会が増えたのだから、『うち』の人である国民全員で対応する方法を考える」というものでしかない。つまり、「家庭」と「国家」という「家」の規模の違いにより、事象や対処方法は全く異なって見えるが、「うち」

と「よそ」の問題であることに変わりはない。

このように、複雑になっている状況とその変化を把握し、対処するには、まずは本稿で示したように基本から整理して共通点と相違点を確認するなど、慎重な手続きが必要である。また、もっともらしいが煽情的で、本来の意味を無視する安直で短絡的な「方便」を用いず、またそれに乗って、実態把握から目を背けてはならないのである。そういった「方便」に踊らされれば、生活を支える社会の「益」を損ね、結果的に自身に「利」を損ねることになるからである。

参考文献一覧

- Hornby, A.S. (2013) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*: 8th edition, Oxford University Press.
- Houghton Mifflin Company (2012) *The American Heritage Dictionary*: Fifth Edition.
- Lindsay, A.D. (1935) *Essentials of Democracy*, Oxford University Press, UK.
- スミス, A. (1789b) 『国富論 II』、大河内一男 監訳 (1978)、中央公論新社。
- 宇多賢治郎 (2018) 「経済動向を示す値と経国済民の関係 後編：経済成長と経国済民」、『山梨大学教育学部紀要』、第26号、山梨大学教育学部。
- 宇多賢治郎 (2019) 『『経済学』と『経済』教育の乖離 その3 専門と教養の違いがもたらす乖離』、『山梨大学教育学部紀要』、第29号、山梨大学教育学部。
- 宇多賢治郎 (2020) 『『経済学』と『経済』教育の乖離 その4 家計の赤字と『国の借金』の比較』、『山梨大学教育学部紀要』、第31号、山梨大学教育学部。
- オーウェル, G. (1944) 「ファシズムとは何か?」、The Creative CAT 訳 (2018)、青空文庫。
https://www.aozora.gr.jp/cards/002035/files/59406_66606.html
- オーウェル, G. (1949) 『一九八四年 [新訳版]』、高橋和久訳 (1972)、ハヤカワ文庫。
- 鹿島茂 (2016a) 『ドーダの人、小林秀雄 わからなさの理由を求めて』、朝日新聞出版。
- 鹿島茂 (2016b) 『ドーダの人、森鷗外 踊る明治文学史』、朝日新聞出版。
- 金森久雄、荒憲治郎、森口親司 (編) (2013) 『経済辞典 第5版』、有斐閣。
- 斎藤環 (2015) 『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』、角川文庫。
- 鹿野司 (1990) 『オールザットウルトラ科学』、ビジネスアスキー。
- 小学館国語辞典編集部 (編) (2012) 『大辞泉 第2版』、小学館。
- 土居健郎 (2001) 『「甘え」の構造』、弘文堂。
- 福澤諭吉、小幡篤次郎 (1872) 「初篇」、『学問のすゝめ』、青空文庫。
https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/47061_29420.html
- 平凡社 (編) (2006) 『世界大百科事典 第2版』平凡社。
- 松村明 (編) (2006) 『大辞林 第三版』、三省堂。
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 平成29年告示』。
- リンゼイ, A.D. (1935) 『[増補] 民主主義の本質 —イギリス・デモクラシーとピューリタニズム—』、永岡薫 訳 (1992)、未来社。